

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	16H06308	研究期間	平成28(2016)年度 ～令和2(2020)年度
研究課題名	環境学、医学の両方向からアレルギーの制圧・撲滅をめざす総合的、系統的研究	研究代表者 (所属・職) (令和3年3月現在)	高野 裕久 (京都大学・地球環境学堂・教授)

【令和元(2019)年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準	
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる	
A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる	
A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である	
○	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

本研究の最大の目的と意義は、「環境汚染物質によるアレルギー悪化メカニズムの根源的、本質的解明とそれを用いたアレルギー悪化影響評価システム」を構築することにある。

現時点で発表されている論文は1編程度で、その内容もある限定された化学物質を対象とした結果であり、当初目標・計画からは大幅に研究が遅れていると判断する。そのため、今後一層の努力が必要である。

進捗の遅れの理由として、動物実験装置の導入の遅れ、研究協力者の休業と代替りの研究者の雇用の問題及び Fluorescence Activated Cell Sorter(FACS) Melody 装置の故障が挙げられている。これらの点を速急に改善するとともに、今後の研究計画を見直し、早急に初期の研究目標の達成ができるようにすることを強く望む。

【令和3(2021)年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、十分ではなかったが一応の成果があった。
B	本研究は、「 <i>in vitro</i> 評価系の確立」と「創薬」を含めた総合的・系統のアレルギー対策の樹立を当初の研究目的としている。マウスを主体とする <i>in vivo</i> 研究においては、BPA・TBEP・TDCIPP といった個別の化学物質を <i>in vivo</i> (マウス) で評価する成果は上がっていると判断できる。 一方、動物実験の成果を総合的・系統的に分析し、 <i>in vitro</i> 評価系を構築する研究に関する具体的成果は、十分には上がらなかった。また、アレルギー悪化の機序解析についても、個別の化学物質が、既知の分子・旧知の病態に与える影響を評価した段階にとどまっており、当初目指していた治療薬の創生(創薬)に関する具体的成果は、十分には上がらなかった。